

「血のいろにゆがめる月は」

血のいろにゆがめる月は、  
患者たち廊のはづれに、

今宵また桜をのぼり、  
凶事の兆を云へり。

木がくれのあやなき闇を、  
熱植糸し黒き綿羊、

声細くいゆきかへりて、  
その姿いともあやしき。

月しるは鉛糖のごと、  
ココインの白きかほりを、

柱列の廊をわたれば、  
いそがしくよぎる医師あり。

しかもあれ春のをとめら、  
水銀の目盛を数へ、

なべて且つ耐えほゝえみて、  
玲瓏の氷を割きぬ。

語注

**血のいろにゆがめる月** 大陸から黄砂が風に乗ってやってきたため、月の色も赤くみえるほどだったのだろう。下書稿(二)の題には「月赭し、ゴビの砂塵によるといふ」とあった。

**熱植糸し黒き綿羊** 賢治の入院した岩手病院は私立岩手医学校を併設していたので、動物実験をしていたのだろう。

**鉛糖** 酢酸鉛の三水塩のこと。嘗めると甘いが毒性がある。「月しろ」が鉛糖のようであったというのは、鉛糖の水溶液が白いため。これに酢酸を加えたものを鉛糖水と呼び、かつては患部の洗浄や打撲傷のパック療法によく用いられた。

**ココイン** 南米原産のコカノキの葉を原料とした薬物で、無色または白色の結晶性粉末。無臭で苦みがある。局所麻酔剤としてよく使われた。

大意

黄砂のために血の色に染まって歪んだ月は、今宵もまた桜の木を上り、入院患者たちは廊下のはづれに集まって、これは何か不吉なことの前触れではないかと囁き合う。

木の陰の暗闇の中を、細い声をあげて行ったり来たりするのは、実験のためにウイルス接種を受けた黒い綿羊で、その姿はなんとも不気味である。

月の光は鉛糖のように白く、柱の並んだ廊下を渡ると、麻酔用のココインの白い香りが漂う中を、医者たちはあわただしく横切っていく。

その一方、春のおとめたちは、皆が忙しさに耐えながら微笑みを浮かべ、体温計の目盛りを読んだり、透き通った氷を割ったりしている。

評釈

「文語詩篇」ノートに書かれた下書稿(一)、無罪詩稿用紙に書かれた下書稿(二)、その裏面

に書かれた下書稿(三)、その余白に下書稿(四)、定稿の五種が現存。生前発表なし。

「文語詩篇」ノート」の「1961年」には、「四月卒業ヤム 猪キ月、山羊、葉桜、入院、鸚鵡ノゴトクノかの人もし思はざらば我も苦しくはあらざらんを」「退院 いざや起て まことの恋に」という記述があり、また「東京」ノート」の「岩手病院」と書かれた項にも「検温 山羊ノ赤キ月」といった記述がある。先行作品としては入院中に詠んだ短歌89(96をあげることができる)。

先行研究は儀府成一「桐の花むらさきに燃え」(『宮沢賢治・その愛と性』・昭和四十七年十二月・芸術生活社)、立川昭二「なべて且つ耐えほゝゑみて」(『臨死のまなざし』・平成五年四月・新潮社)、仙石規「血のいるにゆがめる月は」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』・平成十二年九月・柏ブライノ)などがある。

賢治は大正三年に盛岡中学を卒業した後、岩手病院に入院することになる。理由は『新校本全集』の年譜等によれば「肥厚性鼻炎」であったとのことだが、耳鼻咽喉科の医師である仙石規は(前掲)、「当初の入院予定日数が十日となっていたことなどにより実際名は「慢性副鼻腔炎」に間違いはないだろう」とする。つまり蓄膿症であったようだ。手術後も熱が下がらずチフスの疑いがあったとされているが、仙石によれば手術後の感染症によるものだろうとのことである。

仙石も述べているように、文語詩の前半では不気味さが漂っていて、後半では月しろ、白きかほり、水銀、玲瓏といった具合に、舞台は明るく、白くなっている。鉛糖、医師(白衣)、氷…… 同じ効果をもたらしている。悩ましい空間としての病院が前半に、しかし優しく勤勉な看護婦たちのいる空間としての病院が後半に描かれていると言つてよいだろう。

本作に関連するとされる短歌を「歌稿「B」」からあげておく(89～96)。

われひとり／ねむられずねむられず／まよなかの窓にかゝるは／猪焦の月

ゆがみひがみ／窓にかかれる猪こげの月／われひとりねむられず／げにものがない。

われ疾みて／かく見るならず／弦月よ／げに恐ろしきながけしきかな。

まことかの鸚鵡のごとく息かすかに／看護婦たちはねむりけるかな。

星もなく／赤き弦月たゞひとり／窓を落ち行くはたゞごとにあらず。

ちばしれる／ゆみはりの月わが窓に／まよなかにかきたりて口をゆがむる。

月は夜の／梢に落ちて見えざれど／その悪相はなほわれにあり。

鳥さへも／いまは啼かねば／ちばしれる／かの一つ目はそらを去りしか。

さて、これらの短歌を見ると弦月が深夜に沈んでいっていることから、ここで登場する月は上弦の月であることがわかる。しかし、文語詩では「今宵また桜をのぼり」となっており、この月も「ゆがめる月」であったから、こちらは下弦の月であったことになる。「歌稿「B」」の94と95の間には、文語詩への改作のためと思われるメモ(「赤き月、葉桜、山羊ノ患者たち」)があるので、賢治がこの短歌群を見ながら文語詩を作ったことは明らかだ。つまり賢治は意識的に上弦の月を下弦の月に書き換えたということになりそうだ。

上弦の月は大正三年の五月初めに、下弦の月は五月半ばに見ることができたので、単純に虚構化が施されたとも言えない。「歌稿「B」」や文語詩の下書稿(二)の手入れには、「葉桜」の文字もあるが、岩手県での桜の開花が四月末から五月の初めであることから、葉桜の季節は五月半ば以降ということになるので、その意味でも時期が五月半ばに設定された可能性は高いと思う。

賢治が上弦の月を下弦の月に置き換えたのは、死を意識せざるを得なかった五月初めの心境ではなく、熱も下がって退院を目前にした五月半ばの心境を描こうとしたからだという解釈も成り立つ。



岩手医科大学前にある本作の詩碑

しかし、そうなると、なぜ短歌群から、黄砂の夜の月という不気味な背景を借りてきたのかという新たな問題が生じることになる。これは死の恐怖こそ去つても、賢治を悩ませたもう一つの事態が赤黒い不気味なものとして迫っていたことを意味するのではないだろうか。

短歌群では月が梢の向こうを沈んでいくと書かれていたが、文語詩では月が桜を上っていくと書かれている。春の象徴たる桜の木の向こうでむくむくとせり上がってくる赤黒いもの……これは何だろう。

「春になって、蛙は冬眠から覚め、蛙のいる穴へ、ステッキをつきさせば、穴から冷たい空気が出る。ほの暖かい桃いろの空気に……」。森莊已池は、自作の詩の一節を賢治に聞かせると、「あ、それはいい、よい詩です」「実にいい。それは性欲ですよ。はつきり表れた性欲ですナ」「フロイド学派の精神分析の、好材料になるような詩です」と答えたという（森莊已池『宮沢賢治の肖像』・昭和四九年十月・津軽書房）。そんな賢治であったから、性欲が頭をもたげる季節である春の心象を、こうした形で記録したとしても不思議ではないように思う。

長い冬が終わって自然は急に活気づき、性欲が頭をもたげる春。短歌群では死を象徴していた「血のいろにゆがめる月」が、文語詩では頭をもたげる赤黒い性欲の象徴として認識され直し、清楚にして勤勉な看護婦と対比することに文語詩のテーマは移行していたとすることも可能ではないだろうか（短歌群自体も、頭をもたげる性欲に苦しむものだったとする解釈もできるかもしれないが……）。男ばかりの中学校生活を終えたばかりの賢治にとつて、若い女性たちと昼夜を共にし、寝息まで聞くことができた病院生活がどれほど強烈な経験であったかは想像に難くない。まして、この看護婦たちの中に、賢治の初恋の相手がいいたことを我々は既に知っているのである。賢治は「文語詩篇」ノート」に、「退院 いざや起て まことの恋に」と書きつけたが、その思いの裏にこうした懊悩があったと仮定することは、決して不自然なことではないように思う。

## 42 車中（二）

夕陽の青き棒のなかにて、  
開化郷土と見ゆるもの、  
葉巻のけむり蒼茫と、  
森槐南を論じたり。

開化郷土と見ゆるもの、  
いと清純とよみしける、  
寒天光のうら青に、  
おもてをかくしひとはねむれり。

### 語注

**開化郷土** おそらくは賢治の造語。開化というのは、文明開化以降の新時代の知識を身につけたという意味だろう。郷土とは郷村に居住した武士のことで、城下土よりも低い存在とされた。ただ、ここでは田舎紳士といった意味であると思われる。

**森槐南** 文久三年、尾張名古屋に生まれ、明治四四年に没した漢詩人。十八歳で太政官に出仕し、明治四二年には伊藤博文に随行した際、ハルビン駅で負った銃創がもとで四九歳で没している。読み方は「もりかいなん」。

**よみする** 「良し」の語幹に接尾語「み」の付いたもの。よしとする。

**寒天光** 賢治は雲の様子を寒天質（膠質＝コロイド）に喩えることが多かった。第一連の「青き棒」の言い換えだろう。

**ひと** ここで「ひと」とされているのは賢治その人のようにも思えるが、下書稿には「きみ」とあり、また「文語詩稿 一百編」にある同題の「車中（二）」には「開化郷土」と一緒に「むすめ」が登場していることから、開化郷土と乗り合わせていた娘（彼の孫娘？）のことであろうと思う。「車中（二）」との関連は極めて深いと思

われるが、その下書稿(一)には「開化郷土と見ゆるひと／ちさきむすめをだき来り／椅子におろして微笑せり」とあり、賢治は「開化郷土」の方を狐の皮を首に巻いて新聞を読む俗物とし、「むすめ」は「けいとのまりをとりいだす」「ばらのむすめ」という聖なる存在として描き分けようとしていたように思える。本作にこの図式をあてはめて考えると、森槐南を論じる俗物の郷土と、つつましく眠る「むすめ」を対比していると考えるべきだろう。

## 大意

夕陽が青い棒のように差し込む中、新時代の知識を身にまとった田舎紳士と見える男が、葉巻の煙をもうもうと立てながら、漢詩人の森槐南について論じている。

田舎紳士と見える男は、槐南の詩に出てくるような女性を清純だと絶賛しているが、青い光線のさす中を、娘は顔を隠すようにして眠っている。

## 評釈

黄野(220行)詩稿用紙に書かれた下書稿と定稿の二種が現存。生前発表なし。

「文語詩稿 一百編」に「車中(二)」があり、下書段階ではこちらにも「開化郷土と見ゆるひと」とあった。また同下書稿に「七時雨」とあることから、若い夫婦が夜行列車で七時雨の傾斜を登っていくシーンのある習作「氷と後光」にも関連がありそうだ。列車の中であること、聖なる存在として子供が描かれていることなどに共通性があり、賢治は同一の経験からこれらの作品をかき分けたのかもしれない。

先行研究に島田隆輔『文語詩稿』構想試論『五十篇』と『一百篇』の差異(『国語教育論叢 4』・平成六年二月・島根大学国語学会)、赤田秀子「車窓のうちそと」保線工手」を中心に(『ワルトラワラ 13』・平成十二年八月・ワルトラワラの会)などがある。

詩形は「七・七」で始まり、「七・五」が続き、最後は「七・七」で終わっている。変わった形だが、賢治は意識的に試みたのだろう。下書稿は次のとおり。

夕陽の colloidal  
なる棒の中にて  
狸のごとき大坊主

たばこのけむり蒼茫と

森槐南を論じたり

狸のごとき大坊主

いと清純とよみしける

寒天光のうら青に

おもてをかくしきみはねむれり

開化郷土に賢治が好感を抱いていなかったことが窺えるが、一体、何が気に障ったのだろうか。おそらくは公共の場で蒼茫と葉巻をくゆらせ、森槐南論を滔々と展開する傍若無人さ、生悟り具合を嫌ったのだろうと思う。

島田は「いと清純とよみしける」を「寒天光のうら青に」にかかると解釈し、凶作の前兆たる寒天光を絶賛したことに対して怒っているのだとするが(前掲)、ここでは赤田と同じく(前掲)、森槐南を褒めているのだと捉えたい。

そこで思うのは、賢治に不快感を与えたものの一つとして、開化郷土が森槐南を褒めたことを付け加えられるのではないかということである。槐南は明治詩壇を代表する詩人であるが、その基礎を作ったのは父の森春濤であった。春濤は清朝の詩を重視し、香奩こうげん体たいと呼ばれる詩風で一世を風靡した。香奩とは、化粧箱のことで、女性の姿態・媚態などを官

能的に描く作風を言うが、槐南もこれを得意とした。つまり、本作における「清純」と言うのは、槐南が清純なのではなく、彼の詩に登場する女性が清純だと絶賛したのであるうと思われる。

例えば槐南は、明治十二年九月の『花月新誌82』に「玉兔庵酒間贈歌妓某」という詩を発表しているが、これは「誰將消息託微波／羅韞前塵夢影多／一笑痴情猶不断／愁中惘殺美人歌」というもので、成島柳北はこの詩に「婉約可愛」と賛辞を送っている。しかし、賢治がこうした類の情緒を愛したとは思いいくない。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云へば、文学趣味があるからであつた。しかしまだ新しい小説や脚本は出てぬし、抒情詩では子規の俳句や、鉄幹の歌の生れぬ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雑誌を読んで、槐南、夢香なんぞの香奩体の詩を最も気の利いた物だと思ふ位の事であつた。

「明治十三年の出来事だ」と書き出される森軟外の「雁」の一節である。賢治が車中で遭遇した開化郷土が文明開化を目の当たりにした世代だつたとすると、当時は六十代くらいであつたことになるが、これは「雁」の岡田の世代とほぼ重なる。槐南を青春時代に読んでいたとしても不思議ではない。

槐南はその後、自らの作風を恥じ、時事や史実、社会正義などを扱うようになり、伊藤博文を悼む長詩「帰舟一百韻」などでも有名だが、こうした傾向の詩を開化郷土が「いと清純」であると言つたとは考えにくい。やはり「開化郷土」の世代にとつての槐南は、右に引いたやうな香奩体時代の詩を連想させる詩人であり、「開化郷土」はそうした風俗への憧れを持ち続け、(孫)娘を前にしても堂々と「いと清純」であると「よみし」たのだと思われる。

賢治は文語詩稿において、恋愛や性をも肯定的に描こうとしていたようだが、それは香奩体を「よみする」感覚とは方向を異にしているように思う。「うたひめ」の存在について、文語詩稿の中で賢治は一貫して否定的だからだ。これを北村透谷風に言い換えれば、晩年の賢治は、ロマンチックな恋愛を称揚する気持ちには傾いていたとしても、江戸時代的な「粋」の感覚は廃したいと思つていたように思えるのである。

### 村道

朝日かゞやく水仙を、  
あたまひかりて過ぎ行くは、

になひてくるは詮之助、  
枝を杖つく村老ヤコブ。

影と並木のだんだらを、  
売り酒のみて熊之進、

犬レオナルド足織れば、  
赤眼に店をばあくるなり。

### 語注

**詮之助** 宮沢賢治研究会の「読書会レポート」(後掲)にもあるように、先行作品である「市場帰り」の下書稿(一)に「僕も今ヒアシンスを売って来たのです」とあることから、賢治以外の人物が想定されていたようだ。しかし、自分の境遇に近い人物として登場させていることは確かであろう。

**村老ヤコブ** 『新語彙辞典』によれば三人のヤコブが推定されているが、島田隆輔B(後掲)は、そのうちのイエスの弟であつたヤコブであろうと言う。が、本稿では『新語彙辞典』に挙げられた三人のうち、キリストの十二使徒の一人であつた大ヤコブであつたとしたい。大ヤコブはパレスチナで殉教するが、スペインに伝道したという伝説があり、サンチャゴ・デ・コンポステラが埋葬地であるとされ、ここはキリスト教の三大巡礼地のうちのひとつとなっている(他はエルサレムとローマ)。大ヤ

コブは貝殻のついた帽子をかぶり、ひょうたん、革袋、杖などを持つ巡礼の姿で描かれることが多いが、賢治は老人が杖をついていたためにヤコブと書いたのだと思われる。

**犬レオナルド** 童話「イギリス海岸」に「それはロバートとでも名の付きさうなもぢやもぢやした大きな犬でした」という表現があるので、レオナルドと名前を付けたくなるような犬がいたということだろう。

**足織れば** 山口達子（後掲）によれば「右に左に模様を描くように走り動く犬の様」であるというが、かげと並木でんだら模様になった道を犬がまっすぐに歩く様子が、機織り機で布を織っているように見えた、とりたい。

**売り酒** 売り物の酒のことだろう。下書稿には「売りなん酒」ともある。熊之進は酒屋の店主のようである。

**店をばあく** 酒屋の主人が店を開けること。下書稿(一)には「呑みて赤眼のノしとみを上ぐる(「ひとみ」とも書かれていた)」ともあり、酒を呑んで赤くなつた瞳を上げるであつたものが、(書き間違ひから発展して?) 節をあけるの意に転じ、さらに店を開けるの意に変化していったか。

大意

朝日があつて輝いている水仙の花を、かついでくるのは詮之助、はげあがつた頭をひからせながら通り過ぎていくのは、杖を杖にした老人で、まるで十二使徒の一人である大ヤコブのようである。

影と並木でんだら模様になつた道を、レオナルドとでもいう名前の付きさうな犬が歩く様子は、布を織っているように見え、

一方、熊之進は売りものの酒を飲んで、赤い眼をしながら店をあけるところである。

評釈

黄野(40行) 詩稿用紙に書かれた口語詩「一〇四三 市場帰り」下書稿(二)に対する手入れが下書稿(一)、黄野(222行) 詩稿用紙に書かれた下書稿(二)と定稿の三種が現存。生前発表なし。

先行作品は口語詩「一〇四三 市場帰り」だが、同じ日の日付がある「一〇四二」(同心町の夜あけがた)「および、その文語詩化である「短夜」も関連作品とすべきだろう。

先行研究は山口達子「賢治」文語詩篇定稿の成立(『大谷女子大学紀要2012』・昭和六一年一月)、島田隆輔A「詩の場の変容・『社会性』の獲得 宮澤賢治『文語詩稿』構想ひとつの進路」(『島大國文23』・平成七年二月)、島田隆輔B「再編論」(『宮沢賢治研究 文語詩稿叙説』・平成十七年十二月・朝文社)、「読書会レポート」(『賢治研究100』・平成十八年十月・宮沢賢治研究会)などがある。

まず、同じ日の日付がある関連作品「同心町の夜あけがた」を引用してみる。

同心町の夜あけがた  
一列の淡い電燈

春めいた浅葱いろしたもやのなかから

ぼんやりけぶる東のそらの

海泡石のこつちの方を

馬をひいてわたくしにならび

町をさしてあるきながら

程吉はまた横眼でみる

わたくしのレアカーのなかの

青い雪菜が原因ならば

それは一種の嫉視であるが

乾いて軽く明日は消える  
切りとつてきた六本の  
ヒアシンスの穂が原因ならば  
それもなけばは嫉視であつて  
わたくしはそれを作らなければそれで済む  
どんな奇怪な考が

わたくしにあるかをはかりかねて  
さういふふうに見るならば

それは懼れて見るといふ  
わたくしはもつと明らかに物を云ひ

あたり前にしばらく行動すれば  
間もなくそれは消えるであらう

われわれ学校を出て来たもの  
われわれ月に育つたもの

われわれ月給をとつたことのあるもの  
それ全体への疑ひや  
漠然とした反感ならば

容易にこれは抜き得ない  
向ふの坂の下り口で

犬が三疋じゃれてゐる  
子供が一人ぼろつと出る

あすこまで行けば  
あのこどもが

わたくしのヒアシンスの花を  
呉れ呉れといつて叫ぶのは

いつもの朝の恒例である  
見給へ新しい伯林青を

じぶんでこてこて塗りあげて  
置きすてられたその屋台店の主人は

あの胡桃の木の枝をひろげる  
裏の小さな石屋根の下で

これからねむるのではないか  
ここで描かれているのは、賢治と村の人との交流がうまくいっていないことである。しかし、市場から村に帰ってきた時のことを描いた文語詩「村道」の先行作品にあたる「市場

帰り」(一九二七、四、一一)では、賢治が村での生活に馴染んでいるように見える。最終形態を挙げてみよう。

雪と牛酪バターを

かついで来るのは詮之助  
やお早う

あたまひかつて過ぎるのは  
枝を杖つく村老ヤコブ

お天気ですな まっ青ですな  
並木の影を

犬が黄いろに走つて行く  
お早うよ

朝日のなかから  
かばんをさげたこどもらが

みんな叫んで飛び出してくる

この陽気な詩の、字下げ部分を削除したところで文語詩が成立したように見えるが、文語詩における最後の一行はここにはない。先行作品を見れば、詮之助、村老ヤコブ、犬、こ



移築された同心屋敷。江戸時代に建てられた藩の同心たちの住む屋敷が、戦後に至るまで旧国道(奥州街道)そいに残っていたという。

どもらという具合にストリートに文語詩化されてもいいはずなのに、実際の文語詩ではこどもらの代わりに「売り酒のみて熊之進、赤眼に店をばあくるなり」という一行が書かれている。このアイディアは文語詩の下書稿(一)の段階からのものであったことがわかるが、これが市場に向かう時に見かけた「屋台店の主人」が形を変えて現れたものだということは、説明するまでもないだろう。

さて、この屋台店の主人であるが、彼は「同心町の夜あけがた」を先行作品とした「文語詩稿 一百篇」所収の「短夜」でも文語詩化されている。

#### 短夜

屋台を引きて帰りくる、  
目あかし町の夜なかずぎ、  
うつは数ふるそのひまに、  
もやは浅葱とかはりけり。

みづから塗れる伯林青の、  
むらをさびしく苦笑ひ、

胡桃覆へる石屋根に、  
いまぞねむれと入り行きぬ。

賢治の姿はここにはなく、ただ屋台店の主人の様子が客観的に描かれているのみである。が、賢治がこの詩を残したのは、自分とは全く反対の動き方をしている存在への興味からであったと思われる。つまり早起きしてレアカーを引いて町に向かう賢治に対して、この主人は、町から村に屋台を引いて戻り、これから村で眠ろうとしているからである。さらに踏み込めば、町を捨てて村に入った者(賢治)と、村を「さびしく苦笑ひ」して、町で生活のたつきを得ようとする者(主人)との対比がなされているとも言えるだろう。ここには賢治の姿こそ現れていないが、屋台の主人が「むらをさびしく苦笑ひ」する姿に、町をさびしく苦笑いする賢治自らの心情もくみとれるように思う。下書稿(一)の手入過程で、賢治は屋台店の主人を「遁げるがごとくねむるなり」と書いているが、これもリアカーを引く賢治が程吉に横目でにらまれた時のいたたまれなさを、全くの裏返しにして表現したものであるように思えるのである。

では、文語詩「村道」における「熊之進」に、賢治はどのような意図を盛り込もうとしたのだろうか。

島田隆輔A(前掲)は、「酔態を演ずる「熊之進」の存在は、爽やかな労働を体する「詮之助」や「村老ヤコブ」と対極にある現実といえるだろう」という。しかし、この朝の村道を歩いている者の誰もが、村の主たる仕事である米作には携わっていない。その意味で、彼らは市場にヒアシンズを売りに行く賢治の同類なのである。町に花を売りに行くという詮之助はもちろん、村老ヤコブも、現役で農作業をしているとは考えにくい。そして、犬もこどもらも、村にとってはアウトサイダーなのである。従って、「熊之進」が、ただ一人で社会悪を代表しているのだということではなく、「こどもら」よりも、一層、村落から逸脱しているイメージの強い存在として登場しただけであるように思う。

こうして賢治は、「市場帰り」においては、自分を横眼で睨むインサイダーの程吉のよくな存在がいなかったために、村のアウトサイダーたちと陽気に挨拶ができたのであって(もちろん詩の中だけであるが)、決して「同心町の夜あけがた」において、アウトサイダーとしての自分を認識させられた経験を忘れ去って、陽気に村人たちと挨拶を交わせたわけではないだろう。

ただ、アウトサイダーとの間でいくら交流ができたとしても、それが賢治にとっての最重要課題ともいえない。いかにしてインサイダーへの道を目指すかについて、ほとんど何の解決にもなっていないことは十分に認識していたはずである。或る時はインサイダーに睨まれ、また或る時はアウトサイダーなりに村の人々と交流できるということこそが村の現実であって、敵ばかりでも味方ばかりでもないということが、これらの作品群に示された「発見」だったように思えるのである。

さき立つ名誉村長は、  
豪気によりて受け付けず。

寒煙毒をふくめるを、

次なる沙弥は顛を円き、  
その身は信にゆだねたり。

猫毛の帽に護りつゝ、

三なる技師は徳薄く、  
なかば気管をやぶりたれ。

すでに過冷のシロツコに、

最後に女訓導は、  
アラ一の守りあるごとし。

シヨールを面に被ふれば、

#### 語注

**名誉村長** 名誉村長という制度はないだろうから、村長並に人望のある、風格のある人  
ということなのだろう。童話「税務署長の冒険」にも密造酒醸造の黒幕として現れ  
ている。

**寒煙** 寒々とした煙やもや。「毒をふくめる」は、第一次世界大戦で兵器としての使用  
が始まった毒ガスに喩えたか。

**沙弥** 出家はしているが、まだ一人前の僧ではない者のこと。未熟な僧。

**顛** 頂部のこと。頭のとっぺん。「ろ」と読むが、賢治は下書稿(二)の段階で、わざわざ  
「ざっづ」というルビを振っている。

**シロツコ** 北アフリカから南ヨーロッパに吹く湿った熱風。ただし、岩手県に吹くはず  
はなく、比喩的に使われている。

**訓導** 小学校の正教員。師範学校を卒業するなどして教員免許を取らないとなれなかつ  
た。

**アラ一の守り** シヨールで顔を覆っていた姿を、ヴェールで顔を隠すイスラム女性に喩  
えているのであろう。

#### 大意

先頭にたつ名誉村長は、寒々とした煙が立って毒ガスのようなのに、もちまえのたくま  
しさで冷気をものともしない。

次に行くのは頭のとっぺんを円く剃り上げて、そこを猫毛の帽子で護っている僧だが、  
信仰があるのか、やはり冷気をものともしない。

三番目に行くのは徳のない技師、すでに冷えすぎた空気で気管をやられてしまっている。

最後に行くのは小学校の女先生、顔にシヨールをまとっているので、まるでアラ一の神  
に守ってもらっているようで、やはり冷気は気にならないようだ。

#### 評釈

黄野(40行) 詩稿用紙に書かれた口語詩「四信五行に身をまもり」の余白に書か  
れた下書稿(一)、その裏面に書かれた下書稿(二)と定稿の三種が現存。生前発表なし。

先行作品は口語詩の「四信五行に身をまもり」。同じ日のできごとを扱ったと思われる  
口語詩に「職員室に、こっちが一足はいるやいなや」「めづらしがって集ってくる」  
があり、「馬が一足」も関連作品か)、また、これらを文語詩化したと考えられる作品  
に「文語詩稿 五十篇」に収録されている「雪うづまきて日は温き」、「氷柱かゞやく窓

のべに) (島田隆輔は私信で、大正十五年の国民高等学校での体験に基づくものだという)、「来賓」がある(この他、「吹雪かゞやくなかにして」や「文語詩 未定稿」の「訓導」も同じ日の取材によるものかもしれない)。

先行研究は、森莊已池「文語詩笑話」(『宮沢賢治の肖像』・昭和四十九年十月・津軽書房)、赤田秀子「さき立つ名譽村長は」(『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』・平成十二年九月・柏プラノ)などがある。

これらの作品群は、賢治が吹雪の中を小学校で開催された新年会に行つて、帰ってくる時の心象風景が描かれている。佐藤成『証言 宮澤賢治先生』(平成四年六月・農文協)によると、大正十一年から、稗貫郡下の小学校を会場として毎年巡回弁論大会(弁論部農談会)が頻繁に行われ、賢治の退職後も継続されたとあり、『新校本全集』の「年譜」にも、昭和三年二月九日に湯本小学校で農事講演会が開催されたという記録が残っている。

ただし、講演会に正装で臨むのは大袈裟に過ぎる。むしろ関連作品の「来賓」の下書稿(二)に付けられたタイトル「新年」から、小学校で開かれた新年会の時の記録であったとするのが妥当であろう。実際、『新校本全集』の年譜の大正十二年一月一日の記述に「花城小学校の交賀会に出席」とある。ただし、「四信五行に身をまもり」には、「乾いて光る吹雪のなかをノ二里もやってきたので」とあることから、訪れたのは家から近い花城小学校ではなかったと思われる。

そこで盛岡地方気象台で「気象月報原簿」を調べてみると、一月一日が吹雪であった可能性があるのは、一日の降水量が八・五ミリで、午前十一時に風速一〇・三を記録している大正十四年のことであつたと思われ(ただし大正十二年九月より前のデータは残っていない)、さらに先行作品にあつた「向かふの電車のみち」(花巻駅から花巻温泉まで走っていた盛岡電気工業の沿線であろう)といった言葉と併せて考えると、大正十四年の元日に湯口小学校か太田小学校あたりで行われた新年会での出来事を書いているのだということになりそうだ。ついでながら鍋倉にあつた宝閑小学校を舞台にしていたとすると、「女訓導」にあたるのは、当時、同校の訓導であつた高瀬露であつた可能性もあり、だとすると、別の解釈が生じる可能性もありそうだ。

さて、当日の経緯をたどってみよう。まず、口語詩「職員室に、こつちが一足はいるやいなや」では、小学校で開催される催しに招かれた賢治が、職員室に一步立ち入ってみると、そこには日高神社の別当と紋付袴で正装した二人のお百姓が先に来ている。別当は、以前、早池峰の原林で賢治と突き当たつたことを根に持っているのか、賢治のことを怒っているらしい。これを文語詩にしたものが「来賓」である。

その次の段階が「めづらしがつて集つてくる」である。賢治より遅れて僧がやってくる。着いた時はただの冬装束であつたのに、風呂敷からきらびやかな法衣を取り出して身につけていくと、小学校の子どもたちは「めづらしがつて(職員室に)集まってくる」という内容だ。これが文語詩化されて、「雪うづまきて日は温き」になるが、ここでは「県議員殿大居士」の葬儀ということとなり、虚構化が施されている。既に言及した作品で、今は改めるべき点が多いのだが(『宮沢賢治』文語詩稿 五十篇「評釈」・『山手国文論攷』20・平成十一年三月)、僧のモデルを白藤慈秀とし、賢治が白藤の信奉する浄土真宗の形式主義を揶揄しているのだとしたことについては、今も有効だと思つている。これに関しては後述する。

「馬が一疋」は、職員室の窓の外にいる馬と「学校の集りにも出」(下書稿(二))でない男について描いた作品で、文語詩「吹雪かゞやくなかにして」では、吹雪の中の男の目についての詩になっている。内容や舞台の一致、また、口語詩の中にある「マイナスのシロツコ」という言葉が、本作の「過冷のシロツコ」と対応していると思われるため、同日の取材だとしてもいいように思う。

そして小学校での催しものが終わり、来賓たちが外に出るところの様子を描いているのが「四信五行に身をまもり」である。口語詩を見てみよう。

「冒頭原稿なし」

四信五行に身をまもり

次なるべく輩百姓技師は

すでに烈しくやられて居り

最後の女先生は

シヨールをもつて濾してゐる

さても向ふの電車のみちや

部落のひばのしげりのなかに

黄の灯がついて

南の黒い地平線から

巨きな雲がじつに旺んに奔騰するといふ景況である

四連構成の文語詩のうち、口語詩で確認できるのは「百姓技師」である「ぼく」と、「女先生」の部分のみである。

文語詩を見ていこう。名誉村長は、文字通り、元村長、あるいは小学校の元校長であるうか。「職員室に、こつちが一足はいるやいなや」の下書稿(一)を見ると、「一昨年円満辞職した/この学校の前校長」や「分教場の旧校長」も来賓として呼ばれていたことがわかるからだ。文語詩では幾分、揶揄的に書かれているようだが、下書稿(一)では、特にそのような感じは受けない。傲岸不遜な感じは日高神社の別当にあてはまりそうにも思えるが、会場から退出する一団にその名前がないので、日高神社の別当のイメージが名誉村長として虚構化されたのかもしれない。

次を歩くのは、「めづらしがって集ってくる」に出てきた白藤であるう。「顛を円き」とあるのは、やはり白藤を「白淵先生」として揶揄して書いた「氷質の冗談」で、「る頂部だけをてかてか剃って」とあるのと対応していよう。「めづらしがって集ってくる」では、「二重マント」を着ていたと書かれているが、「文語詩未定稿」の「洪積の台のはてなる」には、「このときに教諭白藤/灰いろのイムバネス着て」「イムバネスとは「二重回し」とも呼ばれていた」ともあるから、白藤のトレードマークだったことがわかる。また、「雪うづまきて日は温き」には、浄土真宗が重んじる「讃仏偈」を、白藤の属した本願寺派の名称で登場させてもいるので(大谷派では嘆仏偈と呼ぶ)、ほぼ間違いないだろう。その身を信仰に捧げているというのに、頭には猫毛の帽子を被っているという皮肉(殺生戒を破っている)も忘れていない。

ここで気になるのは、「四信五行に身をまもり」の冒頭の原稿がないことである。「新校本全集」では、「これに先行する紙葉があったのが今は失われて、末尾部のみが残ったものと見られる」とされているが、文語詩化された「さき立つ名誉村長は」の下書稿(一)の前半部分、つまり「四信五行に身をまもり」の失われた部分と一致する箇所が、やはり「現在のところ所在不明」なのだというのにも気になるところだ。どちらも白藤と思われる人物に関する記述や言動が書かれていたと想像できる箇所だからである。

さらに「めづらしがって集まってくる」の冒頭部分も、「一部が破り去られていて、冒頭と末尾を欠く」と『新校本全集』にはある。これも白藤と思われる人物に関する記述や言動が書かれていたと想像できる箇所、原稿コピーを見ても、自然に破れたのではなく、人為的に破られたというのがふさわしい切り取られ方をしている。作品の末尾部分に「いのししのやうな髪毛した/(数文字不明)は」とあるが、当然、人名が入っていたと思われるこの「(数文字不明)」という部分も、判読が困難なのではなく、切り取られているために確認できない箇所なのである。文脈からすると、この後にも白藤に関する記述があったと想像されるが、その断片も見つかからないままである。

原稿が紛失したり、破棄されたり、あるいはインクや消しゴムで抹消されて読めなくなるのは、賢治の場合珍しいことではない。しかし、これほど一系統の作品にそれが集中し、また、いずれも白藤その人を直接指し示すような部分に限られて紛失・破棄がなされているのは気にかかるところだ。

まず考えられるのは、こうした個人攻撃とも思えるような部分を、賢治自身が抹消した可能性である。ただ、賢治は『銅鑼13』(昭和三年二月、編集兼発行者・草野心平)に学校を舞台とした「氷質のジヨウ談」を発表し、そこに「白淵先生北緯三十九度あたりまで/アラビア魔神がはたらくことになつたのに/大本山からなんにもお振れがなかつたですか」と書いている。もし、農学校に関わりのある者がこれを読んだら、誰のことを書いて

いるかはすぐにわかったはずである。他人に対して細やかすぎるくらい的心づかいを示した賢治だが、白藤に対しては不思議とそうした配慮がなかったようだ。となると、いつ世に出るともしれない口語詩や文語詩の下書稿にまで、賢治が丁寧な操作をしたとは考えにくい。ただ、『銅鑼』に発表した際にも「白藤」とせず「白淵」に変えるという最低限度の虚構化、プライベートの保護(?)をしようとしていることを考慮に入れれば、賢治自身が原稿を破棄した可能性もゼロではないと言わなければならない。文語詩「憎むべき「隈」辨当を食ふ」について、清六は伊藤博美に「あまりにあからさまなので…」。いろいろ差し障りもあるので、スミともクマとも読めるようにかえておぎあんだ」と語ったという(伊藤博美「饗宴」の舞台・『賢治研究』42・昭和六二年一月・宮沢賢治研究会)。賢治が残した原稿には、熊とあったのに、これでは実在した人物の誰を指しているのがハッキリしてしまうために、清六が熊を隈に書き換えたというのだ。遺族ならではの氣遣いであるうが、こうした操作がここでも行われた可能性も否定できない。

いずれにせよ、ここで確認しておきたいのは、かなり露骨な風刺の対象となっている「沙弥」が、賢治が疎ましく思っていたという記述が他にもいくつか残っている白藤慈秀であった可能性が高いということである。

さて、その後によく技師について、女訓導については、特に付け加えることもないだろう。賢治自身と思われる人物を「徳薄く」と自虐的に書いてみたり、シヨールをまとった女訓導をイスラムの女性のようだというあたりがユーモラスに描かれている。ただ、全体としてユーモラスな作品であることは認めるにしても、栗原敦が「弱点や罪を抱えながら生きる人間の深みへの慈しみに満ちた視線こそ、賢治「文語詩」のユーモアの源であり、たどり着かれた到達点の意味であった」(「文語詩稿とユーモア」・『宮沢賢治 透明な軌道の上から』・平成四年八月・新宿書房)という水準に達しているかという点、必ずしもそうは言えないように思う。俗物たちを俗物と描くのは結構だが、賢治が自らを、たとえ自虐的に書いていようと、どこか他人を高めから見下しているように思えてならないからだ。もともと宮沢賢治の生臭い側面を十二分に見せてくれるという意味では、興味深い作品であると言えるかもしれないが…

45

### 「僧の妻面膨れたる」

僧の妻面膨れたる、

飯盛りし仏器さゝげくる。

(雪やみて朝日は青く、

かうかうと僧は看経。)

寄進札そゞるに誦みて、

僧の妻庫裡にしりぞく。

(いまはとて異の銅鼓うち、

晨光はみどりとかはる。)

語注

**面膨れたる** 下書稿(三)に「面膨れたる」とルビがあることと、音数の関係から「おもてはれたる」と読みたい。下ぶくれの顔をしていたことを表す。

**仏器** 仏の供物を盛る器で「ぶつき」と読むが、ここでは音数と下書稿のルビから類推して「ぼん」と読むことにする。

**看経** もとは文字通り經典を見る(黙読)ことを意味したが、後に読経(音読)することになった。読み方は「かんきん」。

**寄進札** 寺に奉納した財物と奉納した人の名前とが書いてある札のこと。

**異の銅鼓** 中国南部から東南アジアにわたって広く使われた壺型をした青銅製の太鼓。

宗教的儀式で重要な役割を果たす。賢治はその形を「異」としたのだろう。  
農光 朝日の光のこと。

大意

僧の妻が膨れぼったい顔をして、仏器に入った飯をささげてやってくる。

(雪はやんで青い朝日が差し込み、僧は声たからかに経を読む。)

寄進札をとりとめもなく声に出して読み、僧の妻は庫裡に下がる。

(僧が変わった形の銅鼓を打つと、朝日は緑色にかわった。)

評釈

黄野(20行)詩稿用紙に書かれた下書稿(一)、その裏面に書かれた下書稿(二)、新たな黄野(20行)詩稿用紙に書かれた下書稿(三)と定稿の四種が現存。生前発表なし。

先行作品は認められないが、「文語詩篇」ノート、「東京」ノートに詩想のメモ(後述)がある。

先行研究は山口達子「賢治「文語詩篇定稿」の成立」(『大谷女子大学紀要』2012・昭和六一年一月)、島田隆輔「宮沢賢治・文語詩稿五十篇ノ 詩系譜 の論へ(下)」(翔けりゆく冬のフェノール)試注から(『論攷宮沢賢治2』平成十一年三月・中四国宮沢賢治研究会)、浜垣誠司「僧の妻面膨れたる」詩碑、「石碑の部屋」<http://www.ihatov.cc/monument/065.html>などがある。

盛岡中学を卒業後、賢治は進学を許可されると盛岡市北山にある教浄寺(時宗)に下宿して、受験勉強に励む。本作は、その時の経験に基づく詩である。教浄寺は、鎌倉幕府滅亡の際に自刃した南部家十代・茂時の菩提を弔うために弟の十一代・信長が開創した寺で、庶民からも「おあみださん」として崇敬され、裸まいりの寺としても有名である(『いわてのお寺さん 盛岡とその周辺』・平成十五年八月・テレビ岩手)。その教浄寺に賢治の詩碑が建っているが、その脇には次のような文字が彫られている(平成九年六月八日、吉見正信撰文)。

作中の「僧」は、當山第五十三世住職の、又重琢眞和尚(一八四八—一九三〇)であり、「僧の妻」は陽夫人(一八五九—一九四一)である。

作品は、寺における日常の「看経」(おつとめ)の様子が、朝の清澄さの中で、平静眞摯な文体で描かれている。

「かうかうと僧は看経」とあるように、一心不乱な凜とした気迫が堂内に満ち、それを全身に浴び賢治の一日は始まっていたのである。

「僧の妻面膨れたる」も、おつとりとして豊類な人となりだが、「さゝげくる」から「しりぞく」に至る恭々しきかきしずきの挙措に彷彿とする。

そうした本堂における「看経」のごとく、賢治の日々もくり返されていたにちがいないことがうかがえよう。

やがて、賢治の志望は貫徹され、四月六日、盛岡高等農林学校農学科第二部に、首席入学を果たした。

賢治が下宿していたのは大正四年(一九一五年)であるから、僧は六十代後半、妻は五十代半ば、下書稿には「老僧」とあるが、虚構化は施されていないようだ。ただ、浜垣誠司も書くように「お寺がつけた説明ですから、詩における描写はつとめて好意的な意味に解釈されていますが、なんとなく皮肉なニュアンスを感じてしまう」(前掲)のは確かで、島田隆輔のように「あるまじき欲深さからくる憤懣」(前掲)を書いているのだとさらに手厳しい解釈もある。実際、文語詩稿の構想を書き付けた「文語詩篇」ノートには、  
一月 教浄寺

鐘うち鳴らす朝の祈り、  
光明偏照十方世界、  
次には鳴らす銅の鏡 脈  
おはりに法師声ひくく  
つひにEamonを  
こそ祈りけり。

と書かれている。ヨヨヨとは富、財貨のことであるから、寺に対するかなり辛辣な批判が込められていると解釈していいだろう。ただ、本作が四行を並列的に並べているのではなく、カッコ表記を付けることよって、陰影をつけている点には注意すべきだと思う。と言うのも、カッコのない一行目と三行目は妻の仕草、カッコのある二行目と四行目は僧の仕草、というように書き分けられているからだ。そして、妻に関しては、その容貌に関してケチをつけているだけでなく、宗教的儀式の場に食を持ち込み、寄進の多寡で一喜一憂するような、非宗教的で場違いな存在だと描かれているのに対し、僧については、皮肉な調子が見あたらないばかりでなく、むしろ敬意を抱いているように読める。浜垣は現実的な妻と対比される僧が「いかにも大仰で滑稽に感じられてしまいます。まじめくさったその振る舞いには、どこか俗っぽさが抜けません」とするが、下書稿(二)初期形態を見ても、雪やみて朝日は青く  
本堂はひかりあまねし

帽紅き老僧ひとり  
かうかうと朝の看經

松もみな雪に枝垂れ  
つゝましくきけるがごとし

僧はいま異の銅鼓うち  
晨光は黄とかはりけり

このときに面腫れたる  
僧の妻飯をもたらず

という具合に、僧の姿は英雄的で、枝を垂れる松までもが、経をつつましく聞いていうのだというので、「文語詩篇」ノート」の記述も、寺に対する批判ではなく、妻に対する批判であったように思う。

賢治は前年に『漢和対照妙法蓮華経』を読んで、全身がふるえるほどの感動をしたと言われているが、この時期の賢治は日蓮宗に留まらず、浄土真宗の島地大等(願教寺)を訪ね、また曹洞宗の尾崎文英(報恩寺)を訪ね、彼らに対する敬意は「本堂のノ高座に島地大等のノひとみに映る黄なる薄明<sup>255</sup>」や、尾崎をモデルにした文語詩「たそがれ思量惑くして」などにも窺える。また、この時期にカトリックのプジェー神父(「さわやかにノ朝のいのりの鐘鳴れとノねがひて過ぎぬノ君が教会<sup>280</sup>」)や、プロテスタントのタツピング夫妻と交流したことも知られているから(文語詩「岩手公園」)、宗教全般について、幅広く知識と教養を身につけようとしていたことが窺える。こうしたことから考えても、賢治が教浄寺の住職に対する批判意識はなかったように思われる。

もちろん賢治とて飯を作るのも、給仕をするのも、経済的な心配をするのも重要なことくらいはわかっていたのだろうが、少なくともこの作品にはそうした仕事に対する、またそうした仕事に従事する女性一般に対する敬意は窺いにくい。そしてそれは伝統的な女性蔑視の考え方に繋がるのみでなく、仕送りを受ける身でありながら父・政次郎の仕事を前時代的で、弱い者から搾取するものであるとしか受け取れず、仏教の教えを追究することのみを潔しとしていた若き日の賢治の頑なさにも通じていたように思う。果たして晩年の賢治は、この若き日の自分をどのような気持ちで思い返していたのだろう。残念ながら、本作からそれを窺うことは難しい。



教浄寺にある文語詩の詩碑